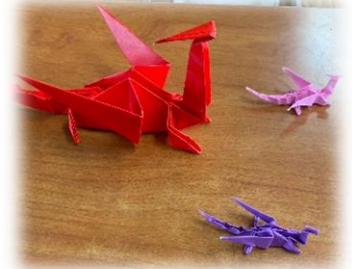




夏休み前、4月からの学級の歩みを子ども達とふり返っていました。「折り紙に学ばせてもらっている」という言葉はZさんがその時に語った言葉です。これまでに折り紙を折ったり、遊んだりしたZさんの折り紙への捉えを知った瞬間でした。なぜ「折り紙が楽しかった」ではなく「学ばせてもらっている」と言ったのだろうかと考えずにはられません。それはHさんの「折り紙は新しい追求ができる」という言葉にもつながるのだと感じています。きっと折り紙を通して発見したことに満足感があったり、新たな可能性に気づいていくことがあったりしたのではないかと感じました。



4年1組のスタートと共に折り紙が始まる

4月。クラス替えをして新たな仲間と共に始まっていくはずだった学校生活でしたが、すぐに臨時休業となりました。臨時休業が明けてもコロナ禍で密を避けながらの生活。その中でできることとして「折り紙」が始まっていきました。すると、子ども達の折り紙の世界が広がっていきます。「これ一緒につくってみようよ。」「え、それどうやってやるの。教えて」などと自然と子ども達同士のつながりが生まれていきます。「こま」や「めんこ」など折り紙で作ったもので遊ぶこともたくさんあります。そこには、何枚も重ねたり、回転が持続したりするように折り方を考えたりと、遊ぶた



めの工夫がこらしてあります。折り紙という材を通して、折り紙そのものが得意になったり、友だちと関わるきっかけとなったりしていきました。このような積み重ねがZさんの「学ばせてもらっている」Hさんの「新しい追求ができる」という言葉につながっていったような気がします。



紙消費問題の解決へ向けて

折り紙に熱中する最中、あることが問題になりました。それは学級で用意した折り紙がすぐになくなってしまったということです。Sさんはこのことを「紙消費問題」と位置づけ、「それなら紙をつくればいいんじゃないの」と話し合いで語ります。さっそく図書館に行き紙作りの本を見つけ調べていきます。どうやら「パルプ」というものを作ればよさそうだと分かったSさんは牛乳パックでのパルプ作りを始めていきます。牛乳パックをゆでた後、Sさんは「牛乳パックのコーティングを剥ぐんだよ。」と言ってフィルムの部分を薄くはいていきます。それをミキサーにかけパルプを作り、木杓を使ってパルプを乾燥させていくと紙が出来上がっていきます。「これでいろいろ作れそうだよ。」と紙ができることにまた可能性を感じるSさん。さらにHさんは和紙作りで利用する「ねり」があるよと、家から持ってきてくれました。その「ねり」を使って紙すきをする、折り紙ができるほどの薄い紙が出来上がっていきます。その紙を見たKさんは「これからも紙のことを追求していきたい。」Tさんは「夏休み明けにみんなで紙を作りたい。」と思いをみんなに届ける姿がありました。紙作りにも新たな追求の可能性がある。その可能性に触れる子どもたちと共に過ごしていけるかと思うと夏休み明けがとても楽しみです。

